

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：14401

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B））

研究期間：2018～2022

課題番号：18KK0017

研究課題名（和文）東部モンゴル新発見の突厥・ウイグル期の定住遺跡に関する歴史・考古学的調査研究

研究課題名（英文）Historical and Archaeological Investigation and Research on the settlement sites during the periods of old Turkic and Uighur Kaghanates in the Eastern Mongolia

研究代表者

大澤 孝 (OSAWA, Takashi)

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：20263345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、東部モンゴルにおける突厥・およびウイグル期の遺跡を日本・モンゴル共同発掘調査として、2018年9月にはスフバートル県テブシンシレー郡の石壇遺跡であるイフ・ボラギーン・オンドゥル・ドブジョー遺跡を試掘し、15～16世紀の北元期の仏教寺院であることを明らかにした。またその後、新型コロナウイルス感染拡大による調査の中断を経て、2022年9月にヘンテイ県のヘルレン河流域に位置する突厥第二可汗国期の石囲い遺跡を発掘した。そこからはモンゴル発のゲルとその中に胡座を掻いて座った夫婦像やゲルに乗せた車を引くラクダ像や馬を引く人物の描かれた画像石を発見し、年代を出土獣骨の放射性炭素年代からも裏付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本・モンゴル共同発掘調査によって、東部モンゴルにおいて、漢文文献やモンゴル文献各種からはその存在が不明であった15～16世紀の仏教寺院の存在を明らかにした点で、今後の中世仏教の起こりやその展開を将来的に解明するうえで大きな意義を有する。またヘンテイ県ツァガーンオボー郡でのチョイチンノール遺跡の発掘からは、突厥遊牧民のテントの形状や日常生活を反映する絵画資料や盗掘穴から掘りだされた石板上に掘られた突厥文字銘文からは、被葬者の身分や生活状況を明らかになるとともに、今後、突厥・ウイグル時代の中央ユーラシア各地のテントや居住者像との比較研究という面で大きな意義を有すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this Japanese and Mongolian joint Historical and Archaeological expedition, in the 2018, we excavated a settlement stone enclosure made of stone named Ikh Bulagijn Undur Dovzhoo in the county of Tevshinshiree, Suchbaatar province, and clarify this was constructed as the Buddhist temple under the North Yuan dynasty during the periods from the last years 15th to the early 16th centuries. Then through the impossible works of two years under the influence the covid-19, On the september of the 2022, we could excavated a new found Old Turkic sarcophagus site named Choichinnuur along the herlen river of the Hentei province and revealed a stone board with a carved picture of the couples inside the old Turkic yurt and images of the camel pulling the cart with tent and outside the tent, a person pulling a horse. According to the carbon-14 analysis, this can be dated as the second old Turkic Kaghanate period.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：東部モンゴル スフバートル県 石壇遺跡 イフ・オンドゥル・ボラック 仏教寺院 ヘンテイ県 チョイチンノール遺跡 線刻画のテントと人物像

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、大澤が代表をつとめた「モンゴル東部新発見の突厥碑文調査と遺跡保護に関する考古学・歴史学的研究」(代表:大澤孝、2014~2018 年度、基盤研究 A)において、2013 年 5 月に大澤とモンゴル科学アカデミー考古学研究所との共同調査で発見されたスフバートル県テブシンシレー郡に位置するドンゴインシレー碑文遺跡を 2015 年に発掘調査した際に、「マウンド内から」同時代の中国唐からの瓦片が使用されていたことなどを踏まえ、本墳墓やその周辺地帯に漢族などの定住民による社会的文化的影響が及んでいた可能性を踏まえて、東部モンゴルのスフバートル県やヘンテイ県やドルノド県などで、突厥・ウイグル時代に関わる定住民との関係が推測される遺跡調査をおこなうことで、モンゴル東部における遊牧民と定住民の共存関係を明らかにするべく構想された。

## 2. 研究の目的

これまで突厥・ウイグル時代の碑文や遺跡は、その中心がモンゴル西部から中央部のアルハンガイ県やオブルハンガイ県にまたがるハンガイ山脈の東側を南から北へ流れるオルホン河流域の草原地帯に建てられたものが多いため、突厥・ウイグルの遺跡は調査も従来まではこうした西側寄りの地点で行われてきた。事実、同時代の隋・唐などの漢文史料からも彼らの活動拠点が西方モンゴルから中央地方にあることを示唆している。それに反して、当時の東部モンゴル方面における活動状況は極めて断片的で有り、彼らに関する碑文・遺跡についてもあまり調査されてこなかった状況にあった。本研究ではこうした調査状況をふまえて、2013 年に新たに発見されたスフバートル県のドンゴインシレーが東部モンゴルでの突厥第二可汗国(西暦 688~744 年)では、可汗の親族で有り、テリス・シャドと呼ばれる東方の支配者に関わる碑文・遺跡であることが明らかにされたこと、そしてその遺跡の調査からその遺跡の建設に瓦片や煉瓦片が見られたことから、必ずその支配者のもとで漢族の職人が加わったことが想定された。この構想にたつて、本遺跡をはじめとする突厥・ウイグル時代の遺跡が想定され、そこに彼らの遺跡建設に関係した漢族たちの定住民的要素が存在するはずとの見通しから、周辺調査を進めた結果、その周辺には敷石を何段にも渡って積み上げた石壇遺跡の他、突厥期の石人やバルバルを伴わないウイグル時代の石囲い遺跡を発見した。本研究では、これら周辺地域における突厥・ウイグル期を中心とした遺跡の発掘を通して東部モンゴルにおける定住民の活動の痕跡を具体的に明らかにするべく、遺跡の試掘調査は進められた。

また、この定住遺跡周辺地帯にも表面調査を行い、近郊の岩山などから、10~12 世紀頃の契丹時代の墨書銘文やモンゴル時代のチベット語銘文、縦型モンゴル語銘文や満州時代の銘文なども見られることなどから、これら銘文内容からも、前時代の定住民的要素が関係していないか、さぐるべく、拓本や写真資料による記録を取った。

また、2022 年 9 月にヘンテイ県ツァガンオボー郡のヘルレン河沿いのチョイチンノールという突厥時代の王族に関わるタムガ印が刻まれた方形の石槨遺跡の発掘作業を実施した。この遺跡は定住民的要素はないものの、その東面の石板表面には、特徴的な陰刻画像が刻まれている点で、当時の生活状況を明確化出来ると考え、調査を行った。また盗掘された穴からは板石断片が出土したので、その用途を他の遺跡との比較から明らかにしようと考えた。また、この遺跡から北東に 6km ほど進むと、その草原には、方形の土手に囲まれた石人石囲い遺跡がある。その石人は頭部は欠損しているが、左手は通常の石人がもつ剣を握る姿ではなく、左膝に手を置いた当時の貴族などをモデルとしたものであることが窺えた。また本遺跡は 2021 年にモンゴル考古研が調査し、その石囲い部分からは、屋根瓦の断片が散在していることが明らかになっていた。本研究ではこうした屋根瓦片から当時の獣文などを採集して、当該地方における瓦職人の存在形態を明らかにするように努めた。また、チョイチンノール遺跡の発掘調査と平行する形で周辺の遡源地帯にも出向き、新たな突厥時代の石囲いが 14 個連結した遺跡を発見したので、ドローンによる計測や各石囲いの計測調査を実施した。

## 3. 研究の方法

2019 年の遺跡の研究方法として、ドローンによる空撮を行い、付近の地形や関連遺跡の分布状況を明らかにした。その上で、ドンゴインシレー碑文・遺跡と距離的に 7km ほど西北には 5 点ほどの石壇らしき遺跡が見つかった。まずはその中でも、規模が大きいイフ・ボラギン・オンドゥル・ドブジョーと呼ばれる石壇遺跡が発見されたので、その遺跡を発掘する事で、当時の定住民の生活状況が明らかに出来るのではないかとこの構想から、試掘を行った。

その遺跡自体は、基壇が大量の石を積んで、基盤が整えられており、発掘の際にはまずこの基壇石を取り除くことに集中した。

上段に建てられていた建物は、西北側の面にかけて、瓦片が大量に集積していたことから、こ

の瓦屋根は西北側に崩壊したことが推測された。調査では、その瓦片の文様や一区画に集積した瓦片の重さから、完形の瓦がどれくらい使用されたのか、という計算を通して、この石壇遺跡の建設に際してどれくらいの瓦が使用されたのかを明確化する事ができた。また北側中央付近からは、壁画に使用された彩色画片や漆喰片が出土し、おそらくはその中心に仏像が安置されていた

ことが推測された。またこの瓦片に描かれた獣文は、本遺跡がデルゲルハン山の西側に位置するのに対して、その山の東側にも同様の石壇があり、そこから出土した瓦の獣文と一致する点から見て、両者が同時代に建設されたことも推測できた。そこから出た木片などを放射性炭素年代分析によって 15～16 世紀初めの寺院であることがわかり、上記の推測を裏付けるものとなった。また、周辺の岩山に墨書された契丹文字銘文やチベット語、モンゴル語、満州語の銘文については、落剥部分が多いため、その内容を知ることは難しく、今後の研究に委ねざるを得ないものの、おそらくはこれら碑文は、南方の中国東北地方からモンゴル東部に至るテルゲン（車の）道と呼ばれる交通路を経てきた人々がこの地を経由する途上で、書き留めた碑文であることが予想される。

また、2022 年の突厥時代のチョイチンノール遺跡の発掘調査では、本来、南北東西の 4 面に置かれた石板のうち、南と西の板石はなくなっていた。北の板石だけが元位置に建てられた状態で、本来は石人が置かれた東方に向いていたであろう板石は南側に外側を仰向けにして倒されていた。その表面には、これまでモンゴル高原では見られない突厥時代のテントや人物像、テントを乗せた馬車を引くラクダ、そして本遺跡の主人公の出自を示す突厥王族のタムガなどが陰刻されていた。これらは今後、同時代の突厥時代の石囲いや石人資料との比較材料になるとの観点から、拓本や写真を採取した。また、石囲いの周囲の 4 メートル周りには、2m 幅で深さ 75cm ほどの周溝がとりまいており、西面、南面、東面の溝からは、馬や羊などの犠牲獣の頭骨片が出土したことから、これらは本遺跡の建設年代を推し量るための分析資料として採集した。また石囲いの東面中央に出来た深さ 1m、直径 70cm ほどの盗掘穴からは、板石断片が見つかった。表面を拓本で採取し、文字がないか、慎重に調査を進めた。

#### 4. 研究成果

本研究調査の中で、まずイフ・オンドル・ブラギイン・ドブジョーと呼ばれる石壇遺跡は、本来、川中島の丘に 15～16 世紀頃に建てられた仏教寺院であることが明らかになった。そのことはこれまで漢文文献やモンゴル時代の文献からは全く不明であったこの東モンゴルでも仏教活動が及んでいたことを明らかにする重要な遺跡と位置づけられる。またこれと同様の仏教寺院が付近の川中島の丘に 4 点ほど存在したことも踏まえ、本地域が東部モンゴルでも重要な仏教を弘布する拠点であった可能性があることを指摘できる。また本寺院の建設を通して、当地の政治勢力が住民を支配していったプロセスが想定され、今後、東部モンゴルでの仏教信仰の実態を明らかにする上でも、またモンゴル中世期の仏教の特色を考える上でも重要な知見を供与するものと考えられる。

一方、2022 年 9 月にヘンタイ県で発掘したチョイチンノール遺跡は方形の石囲いの周りを 8m は場の方形の周溝が取り巻く遺跡構造であったことが明らかになった。この形態自体は西方や中央のモンゴル高原でも見られる型ではあるが、ここには石人や東方に連なるバルバル石（未加工列石）は見られなかった。その代わりに、おそらくは被葬者の生前の像を彷彿とさせる陰刻人物像が、テントの中に夫人とともに刻まれていることは特徴的である。また彼らの生前の生活を想起させるラクダによるテントを積んだ荷車の陰刻や馬の手綱をもつ人物像もみられ、その傍らには突厥の王族の傍系一族に属するタムガが刻まれているなど、当時の牧民世界を表現したものとして評価できる。特にモンゴル高原ではこのような突厥時代のゲルを描いた資料はなく、今回の調査で初めて明確化された。

また盗掘された穴から取り出された石材には突厥文字が刻まれ、そこには被葬者が主君やテングリ神に使えたことが刻まれているという点で、貴重な文字史料を提供するものとなっている。またここから北東 6 km 離れたスバルガン・デプト遺跡の突厥時代の石人や遺跡のタイプからみて、この遺跡は先のチョイチンノール遺跡の被葬者と共に、東部モンゴル高原における突厥アシナ氏族の支配者にかかわるであろうことは間違いない。そしてこれらの遺跡はここから南方へ 100km 下った地点に位置する東部モンゴルを支配したテリス・シャドの拠点からも遠くはなく、その権力の基で、ヘンタイ県のヘルレン河中流域というモンゴル高原の東北部方面の支配を任された在地勢力者にかかわる遺跡であることが推定された。今後はこうした推定をさらに確固とするための現地調査が必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 7件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 大澤孝	4. 巻 80
2. 論文標題 東部モンゴルでの蒙日共同考古学調査の歩みとイフ・ボラ ディン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡発掘の 目的と展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 88-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00064494	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤孝・B. ツォグトバートル・大谷育恵・G. ルンドゥフ・B. パットダライ・Ye. アマルボルド	4. 巻 80
2. 論文標題 イフ・ボラーギン・ウンドゥル・ドブジョーの調査 (2019年度試掘調査)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 94-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00064495	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 80
2. 論文標題 <研究動向> モンゴル国における仏教関連遺跡 (15世紀以降) の調査状況	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 135-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00064497	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 80
2. 論文標題 (翻訳) 李容喜・金庚洙著「モンゴル ドーリク・ナルス匈奴墓出土漆器の漆技法調査」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takashi OSAWA	4. 巻 1
2. 論文標題 (原文はトルコ語)「オテケン・ウイグル可汗国創設におけるカルルク部族の歴史的貢献ーブングル碑文の現地での再調査を通してみたー」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JOURNAL OF TURKISH STUDIES	6. 最初と最後の頁 401-436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 . y . . . . .	4. 巻 40
2. 論文標題 Agujtin dursgal ba Ertnijn Turegijn egel zhuruyn takhlun ongoni sudaltaani asuudald takhirin ongoni mallaga sudalgaani ud dungees	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Archeologijn Sudlal	6. 最初と最後の頁 72-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 T.Osawa, G.Lkhundev, O.Batzorig, B.Batdalai	4. 巻 39
2. 論文標題 Newly discovered runic inscription and tamga-seals from baishint khar mountain	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Arkheoloji Sudlal (Studia Archeologica)	6. 最初と最後の頁 98-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Esin Yu. N., T.Osawa T., Chistobaeva N. S., Burnakov A. A., Oborin Yu. V.	4. 巻 25
2. 論文標題 Fragment of a Tang dynasty mirror with a new runic inscription	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sayan-Alta Scientific Review, 2020-25/1	6. 最初と最後の頁 133-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 ゴーニールンデフ・大澤孝・鈴木宏節・齊藤茂雄・バトムフ ツォグトバートル	4. 巻 79
2. 論文標題 日本モンゴル共同調査“ピチェース”成果報告：突厥ならびにウイグルの石造物	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 16-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 79
2. 論文標題 モンゴル国で新たに確認された金属製の頭部結束具と頸部飾を伴う埋葬事例について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 79
2. 論文標題 研究動向 崖葬墓調査の進展	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 79
2. 論文標題 モンゴルの唐様式墓に関する出版物	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口欧志	4. 巻 79
2. 論文標題 モンゴル国ドンゴイン・シレー遺跡 の三次元記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ベルレー Kh., 大谷 育恵(訳)	4. 巻 77
2. 論文標題 モンゴルの古城址と居住址について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00057200	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大韓民国国立中央博物館 モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所 モンゴル国立博物館、大谷育恵(訳)	4. 巻 77
2. 論文標題 韓蒙共同学術調査報告 第7 冊 モンゴル ゴア・ドフ匈奴遺跡 2017	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金代考古	6. 最初と最後の頁 1-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00057197	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 クラディン N. N. イヴリエフ A. N. ヴァスューティン S. A. ハリンスキー A. V. オチル A. コヴィ チェフ E. V. エルデネボルド L. 大谷 育恵(訳)	4. 巻 77
2. 論文標題 テレルジーン・ドルボルジン城址の発掘と匈奴の都市化研究の若干の成果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金代考古	6. 最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00057198	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Osawa	4. 巻 1
2. 論文標題 An attempt at interpretation of the South-Yeniseian runic inscription in Khakassia (The third inscription on the Turan Mountain)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 A. I. Poselyanin (ed). Material, the International Scientific Conference <Peoples and Culture of Sayan-Alati and surrounding territory>	6. 最初と最後の頁 37 - 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Takashi OSAWA	4. 巻 1
2. 論文標題 Newly discovered Old Turkic runic inscription of the Ulaanchuluut Mountain (Red Mountain) from the Central Mongolia On the basis of the Mongol-Japanese International Epigraphical Expedition in August 2018	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Sravnitel'no-sopostavitel'noe izuchenie Tyurkskikh i Mongol'skikh Yazikov, Materiali Mezhdunarodnoj Nauchno-Prakticheskoy Konferentsii, Yakutsk 18-19 oktyabrya 2018 g.	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤孝	4. 巻 721
2. 論文標題 突厥碑文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『歴史と地理』721、世界史の研究258	6. 最初と最後の頁 37 - 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷育恵	4. 巻 40
2. 論文標題 北魏・北朝並行期の遺跡より出土した金属製頭部結束具と頸部飾	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学考古学紀要	6. 最初と最後の頁 123 - 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Takashi OSAWA
2. 発表標題 PROBLEM OF FONETIC EXCHANGE OF /sh/ ve /ch/ CONSONANTS OF THE ORKHON-YENISEI RUNIC INSCRIPTION: NEW INTERPRETATION OF THE RUNIC INSCRIPTION ON THE STONE WITH A HANDLE FROM KOPYAKOV ULUS, KHAKASSIA
3. 学会等名 VIII , Abakan, C 2021 . (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 T. Osawa, Yu. N. Esin
2. 発表標題 NEWLY DISCOVERED RUNIC INSCRIPTIONS IN THE BOYARY RIDGE (KHAKASSIA)
3. 学会等名 PEOPLES AND CULTURES OF THE SAYAN-ALTAI AND BORDERING TERRITORIES Proceedings of the 7th International Scientific Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大澤孝, ツォグトバートル B., 大谷育恵, ルンデフ G.
2. 発表標題 イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョーの調査(2019年度試掘調査)
3. 学会等名 北アジア調査研究報告会実行委員会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takashi Osawa,
2. 発表標題 New discovery Old Turkic runic sources of the Ulaachuluut Mountain from the Central Mongolia-On the basis of the Mongol-Japanese International Excavation of the 2018
3. 学会等名 International Scientific -Prakticheskaya Conference, Comprehensive-Praktice <Research of Turkic and Mongolian Languages>, October 18 , 2018, North Eastern Federal University, Yakutia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takashi Osawa
2. 発表標題 International Research Project between Mongol and Japan- Interpretation of the Old Turkic runic inscription on the musical instrument discovered from the Mongolian Altay
3. 学会等名 International Scientific -Prakticheskaya Conference, Comprehensive-Praktice, North Eastern University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 L. Ishtseren, K. Kiyama, T. Sasada, M. Sagawa, T. Osawa, L. Munkhbayar, Ts. Amgalantugs, B. Erdene,
2. 発表標題 Mongol-Yaponi Khamtarsan Kheerijn Shinzhilgeenij Angijn Ulz Golin Khundijd Khijsen Arkheologijn Khjguul, Maltlaga SUDalgaani Ur ' dchilsan Ur Dungees
3. 学会等名 Mongolin Arkheologi-2018, Ulaanbaatar ikh surgal,December 2018, Ulaanbaatar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木山克彦、L. イシツェレン、笹田朋孝、佐川正敏、大澤孝、正司哲朗、T.アムガラントクス、L. ムンフバヤル、N. ナムダク
2. 発表標題 2018年モンゴル国オルズ川流域の考古学調査
3. 学会等名 『第20回北アジア調査報告会』愛媛大学文学部、2月24日 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齊藤茂雄
2. 発表標題 汪古部以前の突厥人：9到10世紀於陰山以及代北突厥系遊牧民的活動
3. 学会等名 13-14世紀波斯文史料及蒙古史研究” 學術研討会會議論文集 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroshi Yamaguchi
2. 発表標題 Digital Record of Cultural Heritage relating to Great Burkhan Khaldun Mountain
3. 学会等名 World Heritage-Great Burkhan Khaldun Mountain and It's Surrounding Sacred Landscape: Research, Preservation, and Protection" International Conference,Ulaanbaatar. (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本砂漠学会(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 504
3. 書名 砂漠学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究はモンゴル科学アカデミー考古学研究所との国際共同研究として実施されたが、大澤は、従来より学術提携を結んでいたこともあり、中央ユーラシアの古代クルグズ時代の本拠地であるロシア連邦のハカス共和国において、ハカス言語・文学・歴史研究所とも、比較資料として同国での遺跡碑文に関して共同調査を実施した。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山口 欧志  (yamaguchi hiroshi)  (50508364)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・研究員   (84604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齊藤 茂雄  (saito shigeo)  (70634690)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・日本学術振興会特別研究員   (32689)	
研究分担者	大谷 育恵  (otani ikue)  (80747139)	京都大学・白眉センター・特定助教   (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
モンゴル	モンゴル科学アカデミー考古学研究所			
ロシア連邦	ロシア連邦ハカス共和国ハカス言語・文学・歴史研究所			
モンゴル	モンゴル科学アカデミー考古学研究所			
モンゴル	モンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所考古学センター			
ロシア連邦	ハカス共和国ハカス言語歴史文学研究所	サハ共和国北東連邦大学アルタイ学研究所		